

協働的な研究を促す授業の創造

～ 自分の考えを再構成する力の育成をめざして ～

富高勇樹 保坂久信 平井規夫

1. 主題設定の理由

【自分の考えを再構成する】

現学習指導要領への改訂にあたり、中央教育審議会における国語科の改善の基本方針では、改善の重点の1つとして「実生活で生きてはたらし、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること」や「実生活の様々な場面における言語活動」の明示、「社会生活に必要な国語の能力の基礎」の確実な育成などが示されている。つまり、これからの社会を生きるために必要な能力を確実に身に付けるように指導の充実が求められている。

では、生徒が生きていくこれからの社会はどのような社会であろうか。今日の社会は、グローバル社会、高度情報社会などと様々な捉え方で表現されるが、共通項を挙げるとすれば、「自分とは価値観や考えを異にする人々がいる、そして、そのような人々と共に生きていかなければならない」ということであろう。そのような社会において、生徒が直面するであろう社会的な課題は、正解が1つに決定され解決できるものばかりではない。これからの社会を生きていく生徒には、様々な人が知識やアイデアを共有しながら、完璧ではなくても答えや新たな知識を創り出し、さらに、導き出した答えや知識から新たな課題を見つけ答えや知識を見直していく、このような協働して課題を解決する力が求められると考えられる。

また、教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」（国立教育政策研究所 平成25年3月）では、今後求められる資質や能力として、「基礎力」、「思考力」、「実践力」の三層構造からなる「21世紀型能力」を提案している。その中核には、「一人ひとりが自ら学び判断し自分の考えを持って、他者と話し合い、考えを吟味して統合し、よりよい解や新しい知識を創り出し、さらに次の問いを見つける力」としての「思考力」を位置づけている。その「思考力」を構成する力として、問題の解決や発見、アイデアの生成に関わる問題解決・発見力・創造力、その過程で発揮され続ける論理的・批判的思考力、自分の問題の解き方や学び方を振り返るメタ認知、そこから次に学ぶべきことを探す適応的学習力等を挙げている。

このような背景を踏まえ、本校の研究において「深く考える」授業の創造に取り組む。本研究の「深く考える」とは『何らかの課題に直面したとき、生徒はその課題に向き合って試行錯誤する。そうして自分なりに導き出した答えや、自分の思いや考えを伝えようとして工夫した表現に満足せず、それらをより高次なものにしていこうと吟味し検証していくこと』である。本研究やこれから求められる力に共通することは「自分が考えたことを絶対化しないで、考え直すことができる」ということである。このように考えてみると、今年度から取り組む研究は昨年度までの研究から離れるものではなく、密接につながりがあると考え、昨年度に続き「自分の考えを再構成する力の育成」を国語科ではめざしていきたいと考える。

【協働と探究】

「自分の考えを再構成する」には、どのようなことが必要であろうか。実際の授業の場面で考えてみる。生徒は課題に直面したとき、試行錯誤しながら自分なりの解答や表現を導き出したり、理解の状態に達したりする。そして、その一応の解決に満足し、その解答や表現、理解の状態をより高次なものにしていこうとすることはできないだろう。つまり、自分の考えを絶対化しないで、考え直すことは生徒にとって非常に難しい。しかし、その満足しているところにさらに新たな発見・疑問が生じると、自分の考えを考え直そうとする契機になると考える。生徒の中に新たな発見や疑問を生成するために、「協働」¹⁾という要素と、より高次なものにしていこうとするために「探究」という要素の2つの要素が必要だと考える。

「協働」は、他者とのかかわりを通じた学び合いである。生徒は他者とのかかわりによって自分とは異なる解答や表現、理解の状態と出会うことができるのである。この他者とのかかわりには、価値観や考えを異にする他者への寛容な態度も含む。このような学び合いでは、グループの中で、自分の考えや他者の考えを相互吟味することによって、1人ひとりの考えが深化していくことが期待できると考える。

「探究」は、課題に対して自分なりの答えを導き、そこから新たな課題を見つけ、粘り強く追究していくことである。そこで重要になるのが、学習課題・言語活動の設定である。教師対生徒による一問一答形式のやりとりでは、生徒による「協働」は期待できない。生徒の中に多様な考えを導き出せるような学習課題・言語活動を教科の指導事項に合わせて設定していくことが必要であろう。

この2つの要素を意識した「協働的な探究を促す授業」の創造に取り組むことで、「自分の考えを再構成する力」の育成をめざしていきたい。

1) 高垣マユミ 編著「授業デザインの最前線Ⅱ 理論と実践を創造する知のプロセス」北大路書房 p 38

鹿毛 雅治は「協働」という語について、『一人ひとりの異質性（他者性）に基づいた対話的コミュニケーションによる多様な学びの成立について強調したいので、「共同」や「協同」ではなく、あえて「協働」の語を用いた。』としている。本研究でも他者を価値観や考えを異にする人と捉え、他者との対話による学びの深化を目指すため、鹿毛に倣い、「協働」という語を用いた。

【これまでの研究から】

平成23年度からの3年間の研究では、「知的に自立すること」を目指し、「自ら問う力」の育成に取り組んできた。本校国語科では、「知的に自立する」ために、「探究」と「変容」という要素が必要だと考えた。「探究」とは教科の指導事項に合わせた内容的な深まり、「変容」とは情意面も含んだ課題解決能力の成長の高まりととらえ、「探究を促す言語活動の設定」と「変容を意識させる学習過程」を研究の中心に据え、取り組んできた。

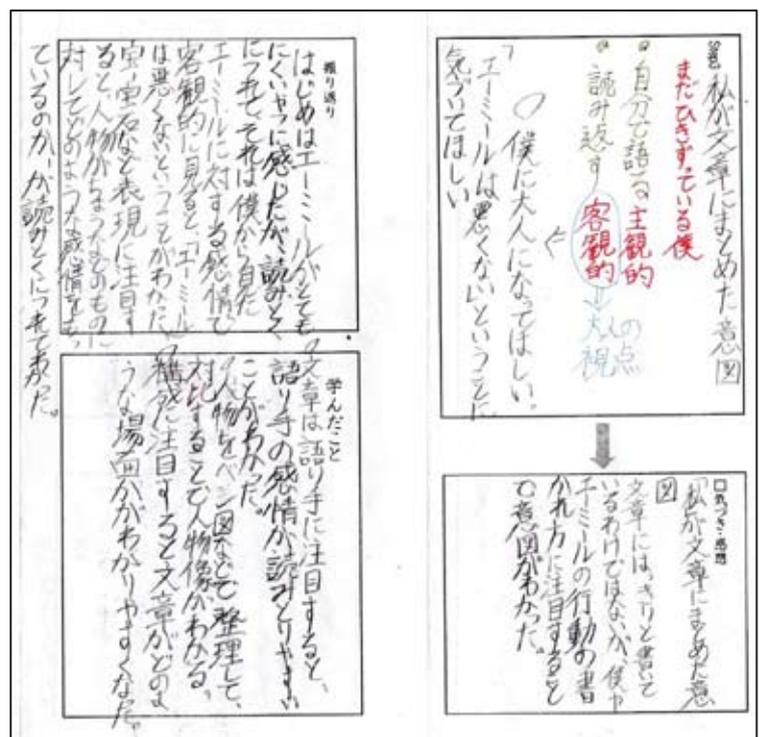
「探究を促す言語活動の設定」

- ・生徒の「気づき」から課題設定を行う。

初発の感想などにおける生徒の気づきから課題設定を行った。

1年「少年の日の思い出」では、『最初は私（書斎の持ち主）の視点で始まっているのに、最後は僕（客）の幼い頃の視点で終わっているのだから作者なりのこだわりがあるのかと思いました。』『「語った」で終わっていることから、書斎の持ち主が客の話を読み終わっているのではないかと思った。』『物語を読み終わった読者が最後に書斎の持ち主の立場になって、物語のつづきを考えるべきではないかと思います。』という生徒の初発の感想をもとに、「どうして主人は語り直したのだろう」＝「主人が語り直した意図」にまで考えることができた。

(これは山梨大学 教授 須貝千里先生の講演を参考にした富高の昨年の実践)



↑ 生徒の1枚ポートフォリオの例

このように生徒の読解をより深めるためのステップとして、生徒がもっている視点から、教師が考えさせたい視点までのつなぎ役となる課題設定ができた。これらの観点を身に付けるために日常の取り組みとして行ったNIEオリジナルワークシート「F U Z O K Uワークシート」の積み重ねも成果と考える。生徒の気づきを基に学習課題を設定することで、課題解決に向けて意欲的に取り組むことができた。

活動が中心になってしまい、生徒も教師も指導事項を見失うことがあった。生徒の実態に即した身に付けさせたい力と課題や活動がずれないように言語活動を設定していく必要がある。

- ・「交流」を通じた自分の意見の形成

状況や目的に応じた交流形態の選択を生徒に考えさせる機会を多く取り入れた。ワールド・カフェは交

流のツールとして、大きな成果を得ることを生徒は自覚していた。また、話し合い活動にも慣れ、どのような活動においてもスムーズな進行が見られる。交流の際に自分の考えと友人の考えを視覚的に整理し、新たな発想を得ようとする様子が見られるようになった。これは、読み取ったことや多くの意見や考えをまとめる際に、マトリクス表やベン図などを用いて整理することを意図的に入れたこと、考える際の気づきなどを記述させたことの成果と考える。

また、iPadなどタブレット型PCの活用にも試みた。今後、情報収集ツールとしてだけでなく、情報交流ツールとして、その機能を有効に活用していきたい。

「変容を意識させる学習過程」

- ・一枚ポートフォリオを活用した学習の振り返り

自己モニター能力を意識し、高めるために一枚ポートフォリオなどを用いてきた。学習過程の区切りやまとめとして、自らの学習を振り返り、感想や新たな発見を記述する形で意識化させてきた。これらの取組は、生徒に学習全体の流れをつかませるだけでなく、自分自身がどのような力を身につけてきたのかという観点でも振り返りとして効果があった。また、「見方が変わったきっかけ」をより明確にさせることを意識させた。気づきの瞬間を振り返ることで、新たな気づきへのきっかけ作りにつながると考える。

上記のことを意識的に行い、これまで教科研究を行ってきたが、標準学力調査を比較（表1）してみると、一定の成果はあったように思われる。

表1 平成25年度 1学年標準学力調査の結果の比較

	教科の正答率		観点別正答率				
	基礎	活用	関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	言語に関する知識・理解・技能
4月	87.7	75.3	69.4	63.8	71.7	63.3	66.2
1月	87.7	85.6	87.7	89.2	86.2	89.8	84.7

2. 全体研究との関わり

本校の全体研究テーマは『深く考える』授業の創造』である。何らかの課題に直面したときに、自分が導き出した答えや、自分の思いや考えを伝えようとして工夫した表現に満足せず、「自分自身を俯瞰」して、それらを吟味することによって、より高次元のものにしていこうとする授業の創造を目指している。全体研究では、この「深く考える」授業に必要な要素として、「自分自身を俯瞰する」ことを挙げている。国語科においては、「深く考える」ことを「協働的な探究を通して、自分の考えを再構成する」ことととらえた。国語科では、「自分自身を俯瞰する」ということを「自分のものの見方や考え方とは異なる立場から自分の考えを見直す」ということに置き換えて考えていきたい。そして、自分とは異なる立場に立つために、他者との「協働」が必要になるであろう。国語科での研究は全体研究とも深くかかわりをもつものであると考える。

3. 研究内容

【協働的な探究を促す授業】

昨年度までの研究では、日常生活や社会生活との関連から「気づき」とコミュニケーションツールとしての言語の特性を踏まえた「交流」という2つの観点からアプローチを試みてきた。今年度からの研究では、その成果を踏まえて、「対話」と「振り返り」という2つの観点からアプローチしていきたい。自分の考えを再構成する、つまり自分の考えを絶対化せず²⁾に考え直すためには、自分の周囲には様々な価値観や考えがあるということを経験的に学ぶ必要がある。その学びには他者との「対話」が必要不可欠である。自分とは異なる考えをもつ他者との「対話」によって、自分の考えを相対化し、捉え直し、新たな自分の考えを創造していく、新たな知の創造のサイクルを育成していきたい。その過程の「振り返り」によって、新たな課題の発見の喜びや協働的な活動（他者との学び合い）の有用性を実感し、それが次の学習への意欲や他者への寛容な態度につながっていききたい。

2) 田近洵一著『国語教育の方法 ことばの「学び」の成立』国土社 p157

田近は、話し合いの重要性を、「話し合いは、未知のもの・ことや自分とは違うものの方・考え方との出会いの場である。異質な他者と出会い、自分自身をとらえ直す場である。私たちは、話し合いを通して、他者と出会い、自分の見方・考え方を相対化する。自分自身を絶対視するところから抜け出すのである。対話・討議の言語主体にとっての意義は、異質な他者との出会いを通して、自己を相対化し、自らを啓発していくことにある」としている。

1) 協働的な探究を促す言語活動、学習課題の設定

ここで言う「協働」とは「対話」という活動を意識していきたい。本校ではこれまでも「交流」を意識した学習を展開し、その有用性は生徒も教師も実感している。ただ、課題の設定にも問題があるが、ただの意見発表で終わってしまったり、深みや広がりをもった交流にまでたどり着けなかったりする場面も多く見受けられる。そこで、教師が「対話」という視点から交流活動を見直すことで、より効果的な交流のあり方に迫ってきたい。「対話」とはどのような行為であるか、いくつかの文献を参考にしてみる。

○会話との違いは、会話が親しいもの同士のおしゃべりであるのに対して、対話は初めての人との情報交流や親しい者との間であっても、それが成されることによって、新しい価値の共有や意味の生成が行われるところにある。そのような対話能力を育成するためには、相手との矛盾や葛藤が生じるような切実な対話体験が必要となる。(田近洵一・井上尚美 編 「国語教育指導用語辞典 第四版」教育出版 p162)

○対話を中心とした授業過程は、①異なる考えとの出会い、②教え・学び合う、③主体性・協働性、④知的対立・葛藤⑤よどみ、迷い、⑥自己省察、⑦探求(意味・真実性の追求)、というキーワードに代表されるように、新たな知が創出される創造の泉であり、「自分の知識や考えの狭さや思考の限界や誤りに気づく」「他者の考え方のおもしろさやすばらしさに感動を覚える」などメタ認知的な気づきが生じやすい。(高垣マユミ 編著「授業デザインの最前線Ⅱ 理論と実践を創造する知のプロセス」北大路書房 p67, 68)

○子どもは、「ひとり読み」の段階で「書き込み・書き出し」しておいた自分の意見を話し合いの場に提出することによって、客観的・相対化することができる。そしてこういう訓練を受けていけば、やがては自分の内部の他者(自分を見つめるもう一人の自分)との対話(メタ認知)が可能になるのである。結局、子どもは二つの他者との対話を通して、自力読みのできる・自立した読者になる。

④自己の内部の他者(もう一人の自分)との対話。

⑥自己の外の他者(クラス仲間)との話し合い・討論

(井上尚美 著「思考力育成への方略」明治図書 p245)

これらの文献を参考にすると、課題の設定の1つの観点として、「矛盾や葛藤が生じる」や「知的対立・葛藤、よどみ、迷い」などが見えてくる。その矛盾や知的対立・葛藤の中から、生徒が思考・判断して新たな価値や考えを再構成していくことができる。生徒の実態や指導事項、言語活動との関連を踏まえながら、実際の授業での具体化に取り組んでいく。このような考えに立って研究を進めていくのであるが、果たして、他者と出会うことは可能なのであろうか。2)で引用した田近の言葉の中で、「他者と出会い」「異質な他者との出会い」と使い分けをしている。その言葉には他者と出会うことは極めて困難であるということが込められているのではなかろうか。しかし、国語科では、その難しいことを通して、自分の考えを再構成していくことに国語科教育の学びがあるのではないかと考える。そこで、本校国語科では「他者との対話」を「自分とは異なるものの方・考え方と出会う」ことととらえる。また、実際の授業に即して考えた場合、いくつかの場面が挙げられる。

1. 指導者と教材の対話＝教材研究
2. 生徒と教材の対話＝自分の考えの形成、生徒の気づき
3. 生徒同士の対話＝交流、自分の考えの再構成
4. 指導者と生徒の対話＝単元を通しての指導

上記のような対話を、単元を通して、また、授業に意図的に取り入れていくことで、「深く考える」授業の創造に迫ってきたい。

2) 「振り返り」を位置づけた学習過程

次のような「振り返り」を意識的に学習過程に位置づけていくことで自分の思考の変容を、生徒一人ひとりに意識化させる。生徒が、その振り返りの場面を可視化（1枚ポートフォリオやノート作りなど）しながら、自分の思考の変容をとらえることでメタ認知的思考を身につけていけるようにしたい。

1. 自分の考えを形成する場面

学習課題に対して、既習事項や自分の経験を振り返って、自分の考えを形成する。

2. 対話する場面

自分の考えの過程を振り返って、他者に説明する。

3. 自分の考えを再構成する場面

対話の過程を振り返って、自分の考えを再構成する。

4. 学習活動全体を自己評価する場面

学習全体を振り返って、自分にどのような力が身に付いたか、新たな発見（きっかけも含めて）、変容、新たな課題などを自己評価する。

4. 研究を支える取り組みとして

1) 単元構想表

富山哲也調査官が推奨する「単元構想表」を基に指導計画を立てることで、より活動の流れが明確になるとともに、課題をどの段階で、どのような流れで設定していくことが望ましいのかについて考えることができる。指導計画を立案する際に活用していきたい。

2) NIE・FUZOKUワークシート

生徒が言葉について興味関心をもち、主体的に言葉とかかわとうとする態度を形成するために、新聞を活用した授業に取り組んでいる。日常的に触れること、身の回りの言語に関心を持つことを目的としている。また、「FUZOKUワークシート」の話題は学習に関わりのあるものを選び、事前学習にも生かしている。

3) 可視化・ノート作り

気づいたことや考えたこと、理解したことなどを可視化することで、情報がより整理されやすくなる。また、自分の学習の様子を振り返る際にも有効であると考えている。

- ・「トゥルミンモデル」を使った論理構成の分析（説明的な文章の読解）
- ・「一枚ポートフォリオ」を使用した思考の変容の見取り（一単元を通じた授業の感想の見取りと変容）
- ・「共感・疑問・批判」を意識した読解（文章読解の際の思考の分類）など
- ・「ベン図やマトリクス表」などを使った情報の視覚的整理

4) 考えの交流

ファシリテーション(facilitation：集団による知的相互作用を促進する働き)やワールド・カフェなどの話し合いツールを取り入れた交流。

5. 本年度の授業実践（指導の詳細に関してはHPを参照）

○中等教育研究会 公開授業（第一学年 C領域）

指導者 保坂 久信,

【授業の概要】

語り手に着目して、少年の日の思い出の虚偽の問題（僕の作りだしたエーメール像、事件に対しての弁明）に気付かせ、僕のエーメールへの思いやちようへの思いなど事件に関するさまざまな思いを考え直すことをおこなう。

1. 目指す言語能力

「今、改めて僕から私に伝えたいことをしたためる」
～語り手に着目し、多角的な読み方をする～

【指導事項 読むこと 中1】

C－エ 文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつこと。
(C－ウ) 場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てること。

【言語活動 読むこと 中1】

課題に沿って本を読み、ワールド・カフェで語り手問題について話し合い、それについて自分の考えを文章にまとめる。

2. 教材名 「少年の日の思い出」（光村図書出版「国語1」）

…（中略）…

6. 指導計画と評価計画（ B領域「読むこと」全60時間中の8時間 ）

(1) 評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
①目的や意図に応じて、文章を読み、内容を的確にとらえて、僕の少年の日の思い出の事件に関する見方や考え方を広くとらえようとしている。	①「大人になった僕」が少年の日の思い出についてどのように考え直したかについて、文章の構成や展開、表現の特徴から、自分の考えをもっている。(エ) ②場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てている。(ウ)	①文章を読んで、事象や行為などを表す多様な語句について理解を深めるとともに、文中の語彙について、関心をもっている。(1)イ(ウ)



↑ 各グループでの考えを発表する



↑ グループの発表を聞き、自分の考えをまとめ直す

(2) 学習過程の概要

単元(教材)名	表現を見つめる (ヴルマン・ハット 高橋 健二 訳「少年の日の思い出」) (C領域全60時間の8時間)				
言語活動	課題に沿って本を読み、ワールド・カフェで語り手問題について話し合い、それについて自分の考えを文章にまとめる。				
指導事項	今改めて僕から私に伝えたいことをしたためる	軸	学習活動	評価規準	時
ア 【語句の意味の理解】 文脈の中における語句の意味を的確にとらえ、理解すること。			<ul style="list-style-type: none"> ・学習の目的を把握し、見通しをもつ。 ・本文を通読する。 ・難解語句などを確認する。 ・登場人物を確認する。 ・初読後の感想を書く。 	【言語についての知識・理解・技能】 ①文章を読んで、事象や行為などを表す多様な語句について理解を深めるとともに、文中の語彙について、関心をもっている。(1)イ(ウ)	1
ウ 【文章の解釈】 場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てること。		○	<ul style="list-style-type: none"> ・前半部分(現在)と、6つに分けた後半部分(過去)の内容を「～の場面」という言葉につなげて簡潔に書く。 ・「僕」と「エーミール」の人物像、二人の関係をベン図に表す。 	【読む能力】 ②場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てている。(ウ)	2 3 4
エ 【自分の考えの形成】 文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつこと。		◎	<ul style="list-style-type: none"> ・「大人になった僕」は、なぜ「私」に話すのも恥ずかしい少年の日の思い出を語る気になったのか、また、そのことの意味は何かを話し合う。 ・「私」が「大人になった僕」の思い出話を聞き取り書いてくれた「少年の日の思い出」を、今、「大人になった僕」が改めて読んだとしたら、「大人になった僕」はどんなことに気づくだろうか、ワールド・カフェ形式で交流する。 ・「私」が「大人になった僕」の思い出話を聞き取り書いてくれた「少年の日の思い出」を、今、「大人になった僕」が改めて読んだとしたら、「大人になった僕」はどんなことに気づくだろうかということについて、各グループの考えを発表し合い、「私」に向けて手紙を書くことで自分の考えをまとめる。 	【読む能力】 ①「大人になった僕」が少年の日の思い出についてどのように考え直したかについて、文章の構成や展開、表現の特徴から、自分の考えをもっている。(エ) 【国語への関心・意欲・態度】 ①目的や意図に応じて、文章を読み、内容を的確にとらえて、僕の少年の日の思い出の事件に関する見方や考え方を広くとらえようとしている。	5 6 7
カ 【読書と情報活用】 本や文章などから必要な情報を集めるための方法を身に付け、目的に応じて必要な情報を読み取ること。			<ul style="list-style-type: none"> ・少年の日の思い出の後に読むといい本を紹介し合う。 	【国語への関心・意欲・態度】 ①目的や意図に応じて、文章を読み、内容を的確にとらえて、僕の少年の日の思い出の事件に関する見方や考え方を広くとらえようとしている。	
関連する〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕	(1)イ(ウ) 文章を読んで、事象や行為などを表す多様な語句について理解を深めるとともに、文中の語彙について、関心をもっている。				
国語への関心・意欲・態度に関する評価	目的や意図に応じて、文章を読み、内容を的確にとらえて、僕の少年の日の思い出の事件に関する見方や考え方を広くとらえようとしている。				

【授業の概要】

本単元では、「おくのほそ道」の一節（俳句）を引用し、その俳句をもとに芭蕉の道中記を作る活動を設定した。

本単元で扱う教材「おくのほそ道」は、日本における代表的な紀行文の1つであり、元禄二年（1689年）三月、江戸を出発し、最終地である大垣に至るまでの行程約2400キロメートル、150日を超える大旅行の体験や見聞を記している。作品は、作者である芭蕉の人生観が凝縮されている。「死を覚悟してまでも旅に出た」作者のものの見方・考え方について読み取り、作者の生き方に対する自分の考えをもたせていく。また、作品中の俳句に触れ、そこから自分の意見や考え、どのように作品についてその魅力を感じたのかを表すという活動を通して、「おくのほそ道」に出てくる芭蕉の思いや古典の世界を深める機会としたい。

1. 単元名・目指す言語能力

芭蕉の俳句の「よさ」を考えよう
 ～ 作品の魅力を、自分のことばで表現する ～

【指導事項 読むこと 中3】

C-ウ 文章を読み比べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること。

伝(1)ア(ア) 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。

【言語活動例】

ア 物語や小説などを読んで批評すること。

2. 教材名 「いにしえの心と語らう 夏草」（光村図書出版「国語3」）

…（中略）…

6. 指導計画と評価計画（C領域「読むこと」50時間中の4時間）

(1) 評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語について知識・理解・技能
①作品の「よさ」を見つけるための観点について、自分の考えと他者の考えを比較しながら考えている。	①作品中の俳句のよさについて、作者のものの見方や考え方（観点）をもとに特徴を評価している。 （ウ） ②作品中の俳句にあらわれている作者のものの見方や考え方をもとにした自分の考えをもっている。 （エ）	①俳句に表れている作者の思いをもとに、ポスターを作成している。 （(1)ア(ア)） ②文章に用いられている漢字を正しく使っている。（(1)ウ(イ)）



↑ 個人の意見をグループで交流する



↑ グループの意見を全体で交流する

(2) 学習過程の概要

単元(教材)名		芭蕉の俳句の「よさ」を考えよう (C読むこと 全50時間の4時間)			
言語活動例		イ 多様な考えができる事柄について、立場を決めて意見を述べる文章を書くこと。			
指導事項		重点	学習活動	評価規準等	時
導入			<ul style="list-style-type: none"> 単元全体の流れを理解し、学習の見通しをもつ。これまでの古典学習について振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> 新出漢字は事前に確認済。 歴史的仮名遣いについてこれまでの学習を振り返る。 	
ア	【語句の意味の理解】 文脈の中における語句の効果的な使い方など、表現上の工夫に注意して読むこと。		<ul style="list-style-type: none"> 「おくのほそ道」の背景にある知識を確認する。また、「門出」「平泉」の場面の音読を通して作品の内容を知り、学習の見通しをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○文語の決まりや歴史的仮名遣いなどに注意しながら音読している。 指既習事項である歴史的仮名遣いの約束などを確認させる。 	1
イ	【文章の解釈】 文章の論理の展開の仕方、場面や登場人物の設定の仕方をとらえ、内容の理解に役立てること。		<ul style="list-style-type: none"> 「おくのほそ道」の「門出」「平泉」の場面を読み、芭蕉の旅への思いや旅先で感じた思いを理解する。 芭蕉が旅の道中で作った俳句を鑑賞する。それぞれの俳句に込められた芭蕉の思いを想像する。また、心に残る俳句を調べていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○芭蕉のものの見方や考え方を、自分自身の考えと比較しながら読んでいる。また、作品に表れているものの見方や考え方について旅先での芭蕉の思いを想像している。 指生徒自身の旅に出るとき的心情などに触れながら芭蕉の旅の意義について考えさせる。また、俳句作品に詠まれた情景をもとに考えるよう助言する。 	1 2
ウ	【】 文章を読み比べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること。	◎	<ul style="list-style-type: none"> 自身選んだ俳句について、芭蕉の思いが込められた作品の「よさ」を伝えるためにどのような観点で作品を読むと良いか交流する。 作品の「よさ」を伝えるポスターを作成する。必要な情報を学校図書館やパソコンを用いて調べていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○作品の「よさ」を伝えるためにどのような観点をもって作品を読めば良いかという自分の考えを持っている。 指交流を通して自分と違う観点をもつ生徒の意見を取り入れるよう助言を行う。また、「よさ」について芭蕉の思いを踏まえて考えるよう助言する。 図司書と連携し、生徒に必要な情報を探すことができる準備をしておく。 	2 3
エ	【】 文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと。	○	<ul style="list-style-type: none"> 作成したポスターを4人組の小集団で交流する。それぞれの成果物の良さや作品を見る観点について自分の考えをまとめていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○作成したポスターについて、共感・疑問・批判点をもとに交流している。 指ポスターの出来でなく、どのような観点で作品の「よさ」に迫っているかに注目するよう助言する。 	4
オ	【】 目的に応じて本や文章などを読み、知識を広げたり、自分の考えを深めたりすること。		<ul style="list-style-type: none"> 作品や作者に関する他の文献などに触れることを聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校や公共の図書館、書店などにも多くの古典作品があることを知る。 	
〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕		(1) ア (ア) 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。		作者の思いが込められている「おくのほそ道」の俳句を引用して、道中記を書いている。	
国語への関心・意欲・態度に関する評価		<ul style="list-style-type: none"> 「おくのほそ道」の俳句から、自分の取り上げたい作品を積極的に探し選んでいる。 作った作品を交流する場面において、他の生徒と自分の考えの違いなどに注目し意見交換している。 評小集団学習等における行動の観察と、道中記の記述内容で評価する。 			

芭蕉の俳句の「よさ」を考えよう

【授業の概要】

「走れメロス」という作品は「語り手」がメロスと同一化してしまうことで、読み手も同様にメロスと一体化してしまう構造をもつ作品である。読み手はメロスと同様に刑場へと疾走している。生徒はそこに緊張感や躍動感などを読むが、そのままにしてしまえば、「人物・出来事」の読みでしかなくなってしまう。

そこで、メロスの、「悪い夢」の告白に着目し、メロスも「語り手」も語らなかった「未練の情」について考えることで、生徒が、「未練の情」を語らないメロスを対象化して自分の考えをもち、この作品に対する読みを深めていきたいと考える。

1. 単元名・目指す言語能力

「悪い夢」について自分の考えを交流しよう
 ～「語り」に着目し、作品に対する自分の考えを深める～

【指導事項 読むこと 中2】

C-ウ 文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること。
 (C-イ 描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること。)

【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 (1) イ (イ)】

抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句などに注意して読み、語彙を豊かにすること。

【言語活動例 中2】

ア 詩歌や物語などを読み、内容や表現の仕方について感想を交流する。

2. 教材名 太宰 治『走れメロス』(光村図書出版「国語2」)

… (中略) …

7. 指導計画と評価計画 (C領域「読むこと」46時間中の6時間)

(1) 評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
① 作品を読み、構成や展開、表現の仕方について考えをもち、交流して自分の考えを深めようとしている。	① 考えを交流するために、作品の構成や展開、表現の仕方について、具体的な部分を挙げながら、自分の考えをまとめている。(ウ) ② 描写の効果や登場人物の言動の意味などを考えて作品の内容を理解している。(イ)	① 抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句などに注意して読み、語彙を豊かにすることができる。((1) イ (イ))



↑ ワールド・カフェ形式の対話

Aと判断した生徒の文章（作品の展開との関連を考えて書かれている。） →

メロスは最後に未練の情について語るべきだ、と思
 う。なぜなら、未練の情が悪い夢に入るのだから、し
 罪の重さが変わってしまうからだ。メロスは、一度だけ悪い夢
 と見たと、言、た、が、もしセリスメンテ、ウスにと、て未練の情
 も悪い夢に入るならば、メロスは二回だけではない、二回悪い
 夢を見たことになる。また、メロスが言った悪い夢は肉体疲
 勞がマイブ入思、考、つ、こ、も、つ、である。そのため、つら思、い
 をし、あきらめようとしていたが、友を裏切らずに、土城
 に行、た、という良い印象を終わ、て、いる。しかし、未練の情
 は妹の結婚式で楽しいときのことである。自分が楽しい
 ところにいたために、友人の友を裏切り、か、つ、て、いる、こ、と、い、う
 ことは、肉、体、疲、勞、の、時、に、み、た、思、い、夢、よ、り、も、思、い、こ、と、と、し
 思、い、思、う、こ、の、よ、う、に、罪、の、重、さ、が、あ、わ、つ、し、ま、ん、は、メ、ロ
 スがセリスメンテ、ウスに、殺、ら、れ、た、だ、け、で、詩、が、れ、た、こ、の、よ、う
 結、末、も、あ、わ、つ、て、く、る、は、ず、だ、だ、か、ら、メ、ロ、ス、は、語、る、べ、き、だ
 と思、う。

(2) 学習過程の概要

単元(教材)名		自分を見つめる (太宰 治「走れメロス」) (6時間計画)				
言語活動例		ア 詩歌や物語などを読み、内容や表現の仕方について感想を交流すること。				
指導事項		重点	学 習 活 動	評 価 規 準	時	
ア	【語句の意味の理解】 抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句などに注意して読むこと。	「悪い夢」について自分の考えを交流しよう	・単元の目標を理解し、「走れメロス」を通読し、作品の内容をとらえ、初読の感想を書く。 (事前) 新出漢字や難解語句について調べる。		1	
イ	【文章の解釈】 文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること。		○	・王城の場面から登場人物の言動、描写に着目しながら、メロスとディオニス的人物像をとらえる。 ・村から王城に向かうメロスの心情をとらえる。 ・人称の変化による効果について考える。	【読む能力】 ②描写の効果や登場人物の言動の意味などを考えて作品の内容を理解している。(イ) 【言語に関する知識・理解】 ①抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句などに注意して読み、語彙を豊かにすることができる。((1)イ(イ))	2 3 4
ウ	【自分の考えの形成】 文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること。		◎	・メロスが自覚している「悪い夢」について、ワールド・カフェを行い、自分の考えをまとめる。 ・前時の交流を踏まえ、メロスの告白について自分の考えをまとめ、交流を行う。	【読む能力】 ①考えを交流するために、作品の構成や展開、表現の仕方について、具体的な部分を挙げながら、自分の考えをまとめている。(ウ) 【関心・意欲・態度】 ①作品を読み、構成や展開、表現の仕方について考えをもち、交流して自分の考えを深めようとしている。	5 6
エ	【自分の考えの形成】 文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつこと。					
オ	【読書と情報活用】 多様な方法で選んだ本や文章などから適切な情報を得て、自分の考えをまとめること。					
関連する〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕			(1)イ(イ) 抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句などに注意して読み、語彙を豊かにすることができる。			

6. 成果と課題

今年度、国語科では、授業において、生徒は「対話」によって、自分とは異なるものの見方や考えをもつ「他者」と出会い、自分の考えを相対化し、捉え直し、新たな知(自分の考え)を創造していく、また、その思考の過程を「振り返り」、新たな課題の発見の喜びや協働的な活動(他者との学び合い)の有用性を実感し、それが次の学習への意欲や他者への寛容な態度につながる、と考えた。そのような考えのもと、「対話」と

「振り返り」という2つの観点から、協働的な探究を促す授業の創造に取り組んできた。そこで、今年度の実践を踏まえながら、成果と課題を挙げる。

1) 協働的な探究を促す言語活動、学習課題の設定

学習課題の設定に際し、集団の中に多様な解釈や考えができるような課題を意識して授業を構想した。実践例で言えば、

「少年の日の思い出」→「私(=主人)」が書いた(語り直した)「少年の日の思い出」を「大人になった僕(=客)」が改めて読んだとしたら、どんなことに気づくだろうか。

「走れメロス」→メロスの語らなかつた「未練の情」は「悪い夢」ではないのだろうか。

「おくのほそ道」→作品の「良さ」を伝えるための観点について考えよう。

「少年の日の思い出」や「走れメロス」の単元では、どのようなことがあったのか、登場人物はどんなことを思ったのかという「出来事や心情の読み」とどまるのではなく、「語り」(=構成や展開、表現の特徴)に着目して読む活動を設定することで、生徒は読みの深まりを実感することができたと思われる。

生徒の振り返り(走れメロス)より(1枚ポートフォリオへの記述)

- ・ 作品を読む時に、ただストーリーを追うだけでは見えてこないところが多いですが、語り手がどう語っているのかを読むことで、ヒントが得られるということが分かりました。はじめ、メロスは友のために一生懸命走っていてすごいなと思っていたけれど、授業を通して単なる友情を描いた物語ではない気がしてきました。
- ・ 確かに最初の頃は良い感動物語だなと思っていた部分もあったが、読み進めていくうちに終わりよければ全てよしというわけにはいかない面がたくさん出てきて、とてもおもしろかった。

また、「おくのほそ道」の単元では、自分の観点で解釈していたものが、他者の観点を知ることで、その観点から俳句を読み直すとまた違った良さが発見でき、読みが深まったと感じる。

読むことの指導において、初読の感想とのギャップを感じ、生徒が作品を読み返して考えようとする学習課題を設定することが必要である。そして、教材研究の視点(=指導者と教材との対話)として「語り」に着目し、学習課題を設定することが、生徒の読みの深まりにつながることを確認できたことは成果である。今後は教師が設定した課題と身に付けさせたい力との整合性について研究を深めていきたい。

2) 「振り返り」を位置づけた学習過程

「振り返り」に関しては、1枚ポートフォリオや学習ノート、ワークシートなど、思考の変容が実感できるように、構成を工夫している。それにより生徒も、指導者も個人の考えの変容を見取ることができる。そのきっかけとなった場面や他者の発言を意識させることで、対話の有用感を実感させたいと考える。

1枚ポートフォリオの例(走れメロス) →

・ 参考図書

文部科学省 中学校学習指導要領解説 国語編 東洋館出版 2008

富山哲也編著「<単元構想表>でつくる! 中学校新国語科授業STARTBOOK」明治図書 2011

高垣マユミ編著「授業デザインの最前線II 理論と実践を創造する知のプロセス」北大路書房 2010

田近洵一著『国語教育の方法 ことばの「学び」の成立』国土社 1997

田近洵一・井上尚美編「国語教育指導用語辞典 第四版」教育出版 2009

井上尚美著「思考力育成への方略」明治図書 2007

山梨大学教育人間科学部附属中学校 研究紀要(2011~2013)

